

Title	プロジェクト・マネジメントの動態分析
Sub Title	
Author	伊東博(Itou, Hiroshi) 関本昌秀
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1981
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001981-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名	伊 東 博	主査	関 本 昌 秀	教授
	(清水建設株式会社)	副査	石 田 英 夫	教授
所属ゼミナール	奥 村 昭 博 研		奥 村 昭 博	助教授

プロジェクト・マネジメントの動態分析

組織が環境に適合するということは、環境－組織－成果に一連のパターンが存在していることを意味している。

プロジェクト・マネジメントの成功は、プロジェクト・タスクの変化に組織特性がどのように適合していったかが鍵となる。プロジェクト処理プロセスでの各フェーズの不確実性の変化に、機能組織の構造、システムのハード部分を組織過程、個人行動のソフト部分があるパターンを示しながら適合していく。

本論文は、機能別組織で行なわれたあるプロジェクトを追跡し、その適合への鍵を探求する。

その結果として、得られたものは、成功要因として、各フェーズでの① 情報処理と権限のバランス ② チーム・メンバーの意思決定をサポートする状況づくり、に集約される。権限を有しないプロジェクト・マネジャーはどのようにして、このタスク処理プロセスを管理するのであろうか。その影響因子として、情報に基づく“影響力”の行使である。メンバーに対する情報処理負荷を削減し、タスクに焦点を合わせた処理プロセスを可能とする。同時にこの“影響力”行使を受容する組織の質的側面が重要となる。

この2つのベクトル和が組織が、環境の変化を吸収し、生存と成長を確保する組織能力である。